路上生活者の個人史

第16回

竹中尚文

長野　瞳　氏(仮名)　生まれ。

私は 1980 年に和歌山県で生まれました。現在 45 歳です。両親と兄の 4 人家族でした。父は自動車修理工場を経営していました。小学校、中学校を卒業して工業高校に進学しました。高校時代は学校に馴染めなくて、アトピー性皮膚炎になりました。医者から、ストレスの多い学生生活をしていると言われました。友だちとも馴染めなかったですが、先生とも合わなかったです。大学進学が希望だったのですが、学力的に無理だといわれました。就職を勧められて適性検査があったのですが、白紙で提出しました。

大学進学が無理だったので、大阪に出てきてデザインの専門学校に入学しました。そこでも何か陰口を言われているみたいで、学校に通う気持ちがなくなりました。それで田舎に帰りました。専門学校をやめて帰った事を両親がとても怒りました。私はどうしても大学進学をしたいと思っていたので、いくつか大学を受験しました。その一つに合格したのですが、親から学費を出すことを断られました。仕方なく地元でアルバイト生活をしていました。

私が 35 歳の頃に両親が相次いで病気で亡くなりました。父親の会社は兄が継ぎました。そ

の時に遺産分割があって、いくらかの財産を手にしました。そのお金で私は大阪に出てきて暮らすことにしました。

大阪に出てきてから私は女性として暮らすように手続きをしました。中学生の頃から、自分の性にたいして違和感がありました。そうした自分自身の性に対する認識のため、田舎でアルバイトをしている時にもずいぶんと嫌な思いをしました。かなりひどい言葉を投げかけられたこともありました。大阪で暮らすようになって、自分の気持ちに合う服装もできるようになりました。しかしワンピースやパンツスーツで仕事に行くと、服装を改めるように言われたこともあります。ひどい差別的な言葉を投げかけられることも多いです。そうした差別のため、なかなか仕事に就けません。

今は、生活保護をもらっています。生活が厳しいので、西成でもここでも炊き出しに並ぶことが多いです。田舎の兄との連絡はほとんど取っていません。兄の奥さんと私の仲が悪いので、どうしよもありません。

この先の人生ですか？　大学に行きたいですね。それは、法学部とか社会学部に行きたいです。

長野さんは、自分の性に対して女性であることが落ち着くという。法的手続きも済ませたそうだ。私たちの支援の列には、いつも男性の服装で並ぶ。支援を待つ間か、支援に来る前か、いつの間にかアルコール飲料を飲んで、大きな声で乱暴な言葉を発することがある。私たちは公園内で活動をしているので、全員に公園内の禁酒禁煙を何度も伝えている。長野さんに注意をすると、謝罪の言葉と共に次回からはそのようなことはしないと言ってくれる。多くの被援助者たちは、長野さんが来ないように私にいう。私から誰も排除したくないという重いがあるので、長野さんに繰り返し注意をすることになる。